青年カントと中国哲学

――ビルフィンガーの中国哲学観を背景として――

井川義次

はじめに

現代世界は日本、中国を含め、あらゆる文明圏は、デカルトからカント、ヘーゲル、マルクス等々に至るまでのヨーロッパ近代理性の哲学に圧倒的な影響を受けて来た。ただ実はヨーロッパ近代の理性の時代においては、イエズス会宣教師を仲立ちとして、莫大な量の中国哲学情報が流入し、それが近代理性哲学の形成と展開に大きな影響を与えていたのは見逃せない事実である。

有名な中国布教の使徒マテオ・リッチ〔利瑪竇〕の同僚ミケーレ・ルッジェリ〔羅明堅〕は「四書」中の『大学』ラテン語訳〔一六〇三手稿。一六六〇年ゴットフリート・シュピツェル『中国文芸論』に所収〕を著した。またプロスペロ・イントルチェッタ〔殷鐸澤〕は朱子『中庸章句』に基づいて『中庸』訳、『中国の政治・道徳学』〔一六六七公刊。一六七二年、メルシゼデク・テヴノー『不思議な多くの旅行記集成』に所収〕を著している。イントルチェッタ訳は一六八七年に、フィリップ・クプレ〔柏應理〕他、多数の同僚との共著『中国の哲学者孔子』に、大幅な改訳を経て『大学』『論語』訳文とともに収められ、ルイ十四世の支援のもとに公刊され、ヨーロッパ全土に普及した。その結果『中国の哲学者孔子』はヨーロッパ近代の多くの哲学者や著名人によって読まれるところとなった。その代表的人物としてはライプニッツがいる。彼は「易」の陰陽二卦に自らが創設した二進法〔0、1〕の先蹤を見、また漢字から普遍記号を導出した。実はライプニッツは、自己

の哲学創設に携わる二〇～三〇歳代という従来言われてきたより早い時期から、中国哲学情報に接触していた。彼はルッジェリ訳『大学』、マルティノ・マルティーニ『中国史』〔衛匡國、一六五九〕の易情報、イントルチェッタ訳『中庸』に目を通し、また四十歳代には『中国の哲学者孔子』出版をつとに知っており、その哲学形成の根幹にこれら中国哲学情報が関与していた可能性がある。ついで学問上ライプニッツに連なる。クリスチャン・ヴォルフは、『中国の哲学者孔子』とフランソワ・ノエルによる「四書」並びに『孝経』『小学』訳書『中華帝国の六古典』〔一七一一〕を参考に、『中国実践哲学講演』〔一七二一講演、一七二六出版〕を公にし、ヨーロッパの知的道徳的理想が儒教―その実は、朱子学ないし宋明理学の解釈を経た―にあると宣言した。[1]

また今回取り上げるベルンハルト・ビルフィンガー〔Georg Bernhard Bilfinger または Bülfinger, 1694-1750〕は、自己をライプニッツ―ヴォルフの学説に連なるものと見ていた。彼はロシアのピョートル大帝をパトロンとするペテルスブルク・アカデミーに論文を寄せる物理学者であったと同時に、当代きっての中国哲学研究者であった。ビルフィンガーは『古代中国人の道徳・政治学説の実例』〔*Specimen doctrinae veterum Sinarum moralis et politicae*, 1724. 以下『古代中国道徳・政治学』と略記〕を著した。なお、この書名はイントルチェッタ訳『中庸』の題名『中国の政治・道徳学』〔Prospero Intorcetta, *Sinarum scientia politico-moralis*, parisiis, 1672.〕にもとづいていると思われる。そして彼が中国哲学理解の際、多くの点で依拠していたものは『中国の哲学者孔子』であった。

その他に百科全書派のヴォルテールやディドロ、文学者ヘルダー、弁証法を提起したヘーゲルも『中国の哲学者孔子』に目を通し、その内容について各自評価を加えている。これらは知られざるヨーロッパ哲学の裏面史と言えるであろう。

カント哲学の方法論とその先人ビルフィンガー

近代的な理性の哲学を確立したイマヌエル・カント〔Immanuel Kant, 1724-1804〕は、主著『純粋理性批判』刊行前の、いわゆる前批判期の自然哲学的論考『活力測定考』で、自己の自然哲学の方法論がビルフィンガーの「中間」項重視の観点と相通じると説いている。[2]

ビルフィンガー氏がペテルスブルク・アカデミー〔学士院〕に寄稿した論文には、真理の探究にあたって私がつねづね用いているひとつの準則が見られる。賢慮をもつ人々が、ともに相手の意図を推察できないでいるか、あるいは両方の意図を推察できていて、しかも相反する見解を主張している場合には、たいていの場合、両派にある程度認められているような何らかの中間的命題〔中間項〕に注意を向けることが、確率的〔蓋然的〕にも理にかなったものなのである。(『活力測定考』第二章第二〇節)

こうした自己の方法論と類似していると説いているビルフィンガーの蓋然性の高さを求める「中間」重視の観点は、彼の『運動中の物体の力とそれらの測定に関して』[3]のうちに見出される。たとえば次の筆者の翻訳のような文章が上げられよう。

もしも、同一物体Aに内在する二つの純粋な活力 vires vivae purae が、中性的運動が他の運動を定まった方向と速度に増大させたり、減少させるように作動し、ある絶対的な運動を産出するために合流するならば、その時、あの〔二つの〕力の作用から複合〔結合〕された反撥する作用は、個々別々の作用の集合したものと等しい。(『運動中の物体の力とそれらの測定に関して』第一部定理二)

もしもわたしが〔測定〕尺度を求めるとすれば、一方と、他方に照応する合一〔一体性〕unitas, quae replicetur in uno, et in altero を発見しなければならない。すなわち〔その合一は〕、何ものかが単純〔単一〕なものに見出され、二倍のものに二倍見出されるような仕方で照応する。……したがって、増大してるものを測定する場合に何ものかが増大するだけでは、測定のためには十分でない。もしも測定されるものが、その二倍に増大するべきならば、〔測定〕尺度もまた厳密に、単純〔単一〕なものに存在するものの二倍である必要がある。(第二部第一章七)

われわれは、諸力が、抵抗力……に比例することを認める。しかしわれわれは、抵抗から均等な運動の内に〔力を〕抽象するが、その運動を産出する諸力が消耗されると判断しない。したがって、上述より、一様な運動に対する直接の注意からは、未だに何も推論できない。しかし、もし多数の事例を、相互に手際よく比較するならば、それらの相関関係 mutuae relationes を気づくだろう。(第二部第二章二一)

叙述を見る限り、これらは純粋に物理学的な論説に止まるもののように見える。しかしながら、こうした記述は確かにカント哲学―ひいてはそれ以降のヨーロッパ哲学―の根底に関わるものであり、その論理の淵源に中国哲学が関与していると指摘する論者が現れた。

一人はアメリカのカント研究家ショーンフェルド〔德馬丁〕である。彼は主著『青年カントの哲学』やその他の論考で晩年にまで至るカント哲学へのビルフィンガー学説、ひいては中国哲学の影響の大きさについて公表している。[4]たとえばショーンフェルドは、ビルフィンガー『運動中の物体の力とそれらの測定に関して』の「反対の調和の思想」「力学的な調和」「相互作用」「活力」等の観念が、カント哲学に流入し、晩期の思想まで展開して行ったと見るが、彼はこうしたビルフィンガーの概念の出所を中国哲学であると把えている。彼の主張は驚くべきものである。ただショーンフェルドはこのことに関して、ビルフィンガーが『古代中国道徳・政治学』において『大学』『中庸』等が取り上げていることを指摘するが、そのラテン語訳文やその漢文原典、ひいてはその注釈に直接当たって検討することはなく、むしろ力動的調和の概念が『老子』的世界観に由来すると推測している。彼は言う「老子とカントは同じ思想を共有する」と。こうした『老子』重視の観点は、現代の欧米における道家重視の思潮と連動しているにすぎないと思われる。もちろん道家的「道」が儒家的「道」と接触し、相互影響の授受関係が戦国時代にあったであろうことは確かだろう。ただ文献資料として限定的に見る限り、ビルフィンガー『古代中国道徳・政治学』が中国古典として取り上げているのは、あくまで『大学』『中庸』『論語』なのである。

もう一人、日本のカント研究者石川文康は、[5]カントの『純粋理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』の三批判書にいわゆる「批判」とは対立する両者の主張を中間に立って、公平に吟味することであり、この姿勢は処女作『活力測定考』の「蓋然性の論理」にまで遡ると主張している。石川はこうしたカントの中間ないし中庸重視の姿勢は、「排中律」を重んずる当時ヨーロッパの論理学的思考においては特異なものであって、むしろ中庸ないし中間項重視はビルフィンガーらによって新たに開発されつつあった論理学の重要概念であったと説く。そして石川もこうした中間、あるいは「真理の度合い」を問題にするビルフィンガーに、『中庸』の論理が流入していた可能性があったことを論述している。石川はその論拠として『古代中国道徳・政治学』〔七四頁〕に間違いなく『中庸』について論じられていることを上げ、また真理が両端の中間にあるとする『中庸』〔朱子『中庸章句』本第六章〕の漢文原文を日本の研究者の解釈にしたがってビルフィンガー

からカントへの『中庸』説の影響の可能性を綿密に論証している。きわめて実証的な研究といえる。

以下において本稿は、ビルフィンガーが実際に取り上げた『中国の哲学者孔子』のラテン語訳の筆者の翻訳を示し、これに対応する漢文原典、また必要に応じてラテン訳の際に採用された明代万暦帝時代の宰相・東閣大学士、張居正（ちょうきょせい）『四書直解』の解釈と照らし合わせて検討を加えたい。これによってカント哲学への中国哲学情報の流入の実情をたどることができると考えられるからである。(6)

『古代中国道徳・政治学』

ビルフィンガーの中国哲学に関する傾倒ぶりは、『古代中国道徳・政治学』章立ての構成からも理解できる。というのも本書の幾つかの章は、『大学』の八條目に範を取っていると考えられるからである。たとえば第一章「知性の養育 Cultura Intellectus」は「致知」に、第二章「意志の改善 Emendatio Voluntatis」は「誠意」に、第四章「外的行為の組成」は「修身」に、第五章「家族の指導 Regimen Familiae」は「斉家」に、第六章「王侯と有力者の義務 Officia Magistratuum et Magnatum」は「治国」に、第七章「帝国の管理 Administratio Imperii」は「平天下」に対応しているであろう。用いられる語彙も『中国の哲学者孔子』『大学』訳と対応している。

『永遠の中庸』*Medium sempiternum* ――『中庸』――

われわれは次に、『中庸』と中間の均衡と言うことに直接かかわるいくつかの文言について検討しよう。はじめに『中庸』第一章である。

天命之謂性。率性之謂道。脩道之謂教。〔天命之（こ）れを性と謂（い）う。性に率（したが）う之れを道と謂う。道を脩（おさ）むる之れを教と謂う。〕（『中庸章句』本第一章）

万物、特に人間の存在原理「性」の根源が、「天」にあり、「道」とはこれにしたがうことであり、道を自覚的に実践するよすがとなるも

のが「教」であるとする。

ビルフィンガーの引く訳文は次のとおりである。

> 天から人間に生得的に与えられたinditumもの〔天命〕は、理性的本性〔性〕natura rationalisと言われる。自然本性naturaが理性的本性に合致し、それに随うことは、規則〔道〕regula、すなわち理性に適合することconsentaneum rationiと言われる。自分と自分に関わるものをそれによって調整しながら、規則を熟練するほど反復することは、準則institutio、すなわち諸徳の教育〔教〕disciplina virtutumと言われる。（『古代中国道徳・政治学』四二頁）

この訳文では、「天」から生得的に注入された「性」を「理性的本性」と訳しており、人間固有の特性・能力としての「理性」と理解していたことになる。儒教の宇宙論的な「性」の位置に依拠するならば、訳文は人間の理性的本性が、天・人を連結する特殊な役割をもつものであると極めて高い位置づけをしていたことになる。ついで「道」を各自が自然本性、特に理性的本性に合致する「規則」への適合、と見ている。最後に「教」を、自己と、自己の所有するものを規則にしたがい調整・反復する「準則」、あるいは「諸徳の教育」であると理解している。

「中和」

ビルフィンガーは以上のような理性に適合・的中することの重要性について「第六四節　徳は中間〔中庸〕を保持し規定〔指導〕することに存するVirtus consistit in tenendo et regendo medio」の中で次のように解説している。

> もし誰かが〔中国哲学の〕理論を尋ねるならば、哲学者〔孔子〕は徳を、中庸の保持に位置づけている。そのため完全な〔小〕論文〔『中庸』〕が、古典のうちの第二番目として著されたのである。……簡潔に師〔孔子〕はこう述べている。知恵にとっての固有の場所は中間〔中

庸〕medium である。それを超過する者は、到達しない者に似ている〔「過猶不及〔過ぎたるは猶お及ばざるがごとし〕」（『論語』「先進篇」）。しかし他の場所で、彼はさらに中間〔中庸〕を規定し、それを理性の命令 rationis dictamen に合致させることによって徳に位置づけている。このようにして、彼は第二番目の『中庸』*Chum-Yum*、すなわち、『永遠の中庸』*Medium sempiternum* とよばれる書籍の四一頁で、彼はこう述べている。

ビルフィンガーはこのように『論語』訳文を援用しつつ「過不及」のないあり方として、中庸を把え、次のように『中庸』の宇宙論的な「中和」の概念を取り上げている。

『中庸』では喜怒哀楽の諸感情が未発動の状態を「中」と把え、感情が発動して好適さを得た様相を「和」と見なす。「中」の状態は天下の「大本」であり、「和」の状態は天下の「達道」であると説く。

喜怒哀樂之未發、謂之中。發而皆中節、謂之和。中也者、天下之大本也。和也者、天下之達道也。〔喜怒哀楽の未だ発せざる、之れを中と謂う。発して皆な節に中る、之れを和と謂う。中也る者は、天下の大本なり。和也る者は、天下の達道なり。〕（『中庸章句』本第一章）

これ自体、何故そう解釈できるのか、ただ原文を読むだけでは理解しがたい。

これに対して張居正の注解は、こうした中和の状態に関して人間心理の機微を詳しく分析しつつ、それらの発動の根源は天にあると述べている。

凡人每日間、與事物相接、順著意、便歡喜、拂著意、便惱怒。失其所欲、便悲哀、得其所欲、便快樂。這都是人情之常。當其事物未接之時、這情未曾發動。也不著在喜一邊、也不著在怒一邊、也不著在哀與樂一邊。無所偏倚、這叫做中。及其與事物相接、發動出來。

當喜而喜、當怒而怒。當哀而哀、當樂而樂。一一都合著當然的節度、無所乖戻、這叫做和。然這中即是天命之性、乃道之體也。雖是未發、而天下之理皆具。凡見日用、彝倫之際、……莫不以此爲根底。……所以說天下之大本。這和、即是率性之道、乃道之用。四達不悖、而天下古今人、皆所共由。蓋人雖不同、而其處事、皆當順正、其物應物、皆當合理。譬如通行的大路一般、人人都在上面往來。所以說天下之達道。〔凡そ人は毎日の間に、事物と相い接するに、意に順着えば、便ち歓喜し、意に拂着れば、便ち悩怒す。その欲する所を失えば、便ち悲哀し、その欲する所を得れば、便ち快楽す。這れは都な是れ人情の常なり。その事物の未だ接せざるの時に当りては、這の情は未だ曾て発動せず。也た喜びの一辺に在りて着せず、也た怒りの一辺に在りて着せず。也た哀と楽との一辺に在りて着せずして、偏倚する所なき、這れを中と叫び做す。その事物と相い接して、発動し出で来るに及んで、当に喜ぶべくして喜び、当に怒るべくして怒る。当に哀しむべくして哀しみ、当に楽しむべくして楽しむ。一一都な当然的節度に合著いて、乖き戻る所無き、這れを和と叫び做す。然れども這の中は即ち是れ天命の性、乃ち道の体なり。是れ未だ発せざると雖ども、然れども天下の理は皆な具わる。凡そ日用・彝倫の際に見るるは、……此れを以て根底と為さざる莫し。……所以に、天下の大本と説くなり。這の和は、即ち是れ性に率うの道、乃ち道の用なり。四もに達して悖らずして、天下古今の人の、皆な共に由る所なり。蓋し人は同じからざると雖ども、その事を処するは、皆な当に正に順うべく、その物に応ずるは、皆な当に理に合すべし。譬えば通行する的大路の如く一般に、人人は都な上面に在りて往来す。所以に天下の達道と説くなり。〕（『中庸直解』第一章）

ビルフィンガーが引用するラテン訳文は、この張居正の解釈にまさにぴったりと対応している。

幸福による喜び〔喜〕gaudium、逆境による怒り〔怒〕ira、苦痛による悲しみ〔哀〕tristitia、手に入れた事物の享受による愉悦あるいは歓楽〔楽〕hilaritas seu laeta、というような心〔魂〕の情念が、活動態へと発生・成長する以前は〔未発〕、中庸、あるいは中間にあること〔中〕medium seu esse in medio と言われる。なぜなら、過剰や欠如に向かうものに対して、それはいまだ無差別だからである。だが情念が成長し、万事が正しい理性の命令〔節〕rectae rationis dictamen に到達するとき〔それ〕は、かの理性との適合

consentaneum、すなわち諸情念間における理性とのある種の共鳴〔和〕quidam passionum inter se et cum ipsa ratione concentus と言われる。そして情念が、たしかに中間にあるとき、それは全世界〔宇宙〕の偉大なる原理、およびあらゆる善行の基礎〔天下之大本〕orbis universi magnum principium ac omnium bonarum actionum fundamentum と言われる。〔情念が〕理性に適合するとき、それは全世界〔宇宙〕の規則 *orbis* universalis regula、すなわち人類普遍の道〔天下之達道〕Regia humani generis via といわれるのである。（『古代中国道徳・政治学』七五頁）

人間の「情念」passiones は、深く「自然本性」に根ざしており、人格完成者は、自然本性を「理性」と「分別」の原理に向け調整、適合させると述べる。クプレによるラテン語訳の喜び・怒り・悲しみ・歓楽の感情についての解説は、見てのとおり張居正注に完全に対応している。そして諸感情が活動状態となる以前の過不足のない状態を、「中」に在ることであるとしている。このように訳文は「中」を、意味未分化の「中庸」の状態と理解したのである。

さらに、人間の情念が成長した際、万事を「正しい理性の命令」によって調節でき、「理性」と「共鳴」し合える状態を「和」であると説いていた。ただこの訳文はさらに進んで感情調整の究極根拠に、「全世界〔宇宙〕の偉大なる原理」を置き、情念の理性への適合を、「全世界〔宇宙〕の規則」、「人類普遍の道」であるとまで極言している。こうした宇宙論的な理性的本性と感情とのバランスに関する論説は、朱子『中庸章句』や、張居正『中庸直解』などのいわゆる宋明理学の枠組みに添った解釈である。「神」ではない自然的宇宙論に基礎をもつ理性的調整という観念が読み込める文章である。

舜の中庸

先にも述べたように石川文康は、『中庸』における伝説の聖王舜（しゅん）の逸話に関わる原文「**子曰、舜其大知也與。舜好問、而好察邇言、隱惡而揚善。執其兩端、用其中於民。其斯以爲舜乎**〔子曰（いわ）く、舜は其（そ）れ大知なるかな。舜は問うことを好みて、邇言（じげん）を察するを好み、悪を隠して善を揚（あ）ぐ。其の両端を執（と）り、其の中を民に用う。其れ斯（こ）を以て舜と為（な）すか、と〕」〔『中庸章句』本第六章〕を提起し、これを、ビルフィンガーが

己の見解に反映させて、この論理がひいてはカント論理にまでつながるものと把えた。炯眼である。というのもビルフィンガーは確かにこの舜の発言を見て、著作に引用しているからである。

「第二〇五節　どのように忠告者の助言を採用するべきか」「どのように他の人々の助言を採用するべきかについて、わたしは舜が帝位に即いたときの宣言を見出す」として、次のように『中庸』訳文を提示している。

舜帝 Xun Imperator の思慮はなんと偉大〔大知〕であったことか！実際に彼は、自分一人の判断と私的な思慮を信頼するのではなく、臣下の助言と知恵を信頼して国家を管理していた。だから舜は身近な事柄〔邇言〕について、他の人々に相談するのを喜んでいた。どんなに卑近で世俗的な事柄であっても、臣下らの解答を熟慮することを常として喜んだ。臣下の者たちが、もしたまたま、理性 ratio にほとんど適合しないことを提起しても用いず、悪が潜むことがらを思慮深く面に露さずに隠していた。こうした仕方で、自分の君主を重ねて忠告する臣下の勇気と忠実さを育んだのである。反対に、理性に一致する助言を用い、そこに善が潜むことを称揚した。それによって、より活発で信頼できる意見が自分の心に明瞭になるためである。もしも述べられた意見 responsa が中庸から僅かに離れ去っていたら aberrarent a medio、〔舜は〕注意深く、それら両者の極端〔極限〕を把捉〔掌握〕していた arripiebat sedulo illorum duo externa。それらを十分〔適切に〕理性の天秤〔標準〕rationis trutina に懸けて、ただそれらの中庸を、秩序正しく人民の指導のために用いていた。このことによって、自分一人の判断と助言だけでなく、臣下たちの判断と助言にしたがって、つねに事を行うようになったのである。そしてこうしたことが、舜がそのような者、すなわちこれほどの帝王となった理由なのである。（『古代中国道徳・政治学』二四〇－二四一頁）

これに対して張居正注釈は次のとおりであった。

舜……但凡要處一件事、不肯自謂、這件事情我已知道了。必切切然、訪問於人。說、這事該如何處。問來的言語、不但深遠的、去加察、

雖是極淺近的、也細細的審察。恐其中、亦有可採處、不敢忽也。於所問、所察之中、雖有說得不當理的、只是不用他便了。初未嘗宣露於人。恐沮其來告之意。若說得當理的、則不但用其言、又向人稱述、加奬他、以堅其樂告之心。然其言之當理者、固在所稱許、而其中、或有太過些的、或有不及些的、未必合於中也。於是就眾論不同之中、持其兩端、而權衡量度、以求其至當歸一者、而後用之。這至當歸一處、叫做中。然這中、亦只是就眾人所說的裁擇、而用之。舜未嘗以一毫之己意、與於其間也。所以說、用其中於民。……不恃一己之智識、而以天下之智識爲智識、故其智識愈大。大舜之所以爲舜者、其以是乎。此知之所以無過不及、而道之所以行也。〔舜は……但だ凡そ一件の事を処せんと要すれば、肯て自ら、這の件の事情我れ已に知道れりと謂わず。必ず切切然として、人に訪問して、這の事は如何に処す該きかと説く。問い来る的言語は、但だに深遠なる的のみ、去きて察を加うるのみにあらず、是れ極めて浅近なる的と雖ども、也た細細的に審らかに察す。恐らくは其の中に、亦た採る可き処有れば、敢て忽せにせざるなり。問う所に於いて、察する所の中に、説き得て理に当らざる的有りと雖ども、只だ是れ他を用いざれば便ち了す。初めより未だ嘗て人に宣露せず。其の来り告ぐるの意を沮くを恐るればなり。若し説き得て理に当る的は、則ち但だに其の言を用うるのみにあらず、又た人に向いて称し述べ、他に奬を加えて、以て其の告ぐることを楽しむの心を堅くす。然れば其の言の理に当る者は、固より許す所に在るも、而れども其の中に、或いは太はだ些かに過ぐる的有り、或いは些かに及ばざる的有りて、未だ必ずしも中に合せざるなり。是こに於いて衆論の同じからざるの中に就きて、其の両端を持して、而して量度を権衡して、以て其の至当の一に帰する者を求めて、而る後にこれを用う。這の至當の一に帰する処を、叫びて中と做す。然れども這の中は、亦た只だ是れ衆人の説く所の的に就きて裁択して、これを用う。舜は未だ嘗て一毫の己れの意を以て、其の間に与からざるなり。所以に、其の中を民に用うと説く。……一己の智識に恃まずして、而して天下の智識を以て智識と為す。故に其の智識愈々大なり。大舜の舜為る所以の者、其れ是れを以てするか。此れ知の過・不及無き所以にして、而して道の行わるる所以なり。〕（『中庸直解』第六章）

この張居正のような合理的解釈に依拠するならば、ビルフィンガーの見た中国の伝説的帝王、舜の判断方法は、正しくカントの「蓋然性の論理」、中間・中庸の妥当さを求める「吟味」「批判」の歴史的先蹤であったと言えるであろう。

またビルフィンガーは、言及していないが、彼の中間重視の論理形成には、次のような『中庸』の言葉が関与していたかもしれない。

天地之道、可一言而盡也。其爲物不貳（二）、則其生物不測。〔天地の道は、一言にして尽す可きなり。其の物為る不貳〔二〕なれば、則ち其の物を生ずること測られず。〕（『中庸章句』本第二十六章）

すなわち『中庸』原文は、天地の道とは、本来二極に分裂して終わるものではなく、究極には統一されるものだということである。

なお『中国の哲学者孔子』の『中庸』訳文はつぎのとおりである。

天と地の理法〔理由・根拠〕Coeli、terraeque ratio、すなわち産出・保持する能力 virtus productiva et conservativa〔天地之道〕は、どれほど偉大であっても、それでも一言で、把握され汲み尽くされ得る。すなわち真理 veritas、あるいは堅固さ soliditas において、たしかにそれ〔理法〕は諸事物の形成において二重のもの duplex ではなく、むしろ単独〔唯一〕unicum で単純〔単一〕な simplex ものである。しかしながらまた諸事物の産生〔創造〕においてはかり知られない。（クプレ『中国の哲学者孔子』、『中庸章句』本第二十六章）

これは後世のいわゆる弁証法の先駆けとも把えられる文言である。ちなみにヘーゲルも『哲学史』「哲学史の序論、東洋哲学」においてこの『中国の哲学者孔子』に目を通していたことを明言している――中国哲学については低く評価していたが――。

結　語

正統的なヨーロッパ論理学は、是非の中間を認めない「排中律」を重視してきた。これに対して、カントが中間と蓋然性の重要性を提唱したことが、ヨーロッパ哲学の画期となったというのが西洋哲学史の常識であった。これはもとよりカントの独創であるかも知れないこと

は排除できないが、歴史的に見た場合、中間・蓋然性を重視する論理が先人、ビルフィンガーによって強調されてきたのも事実である。そしてこうした非ヨーロッパ的な中庸の論理は、むしろわれわれ東アジア文化圏の人間にとっては馴染みのものであり、ビルフィンガーが、いわゆる「中国狂」Sinophile ライプニッツ、そしてヴォルフの衣鉢を嗣いでいたのも、紛うことなき事実であった。

付記：本論文は「青年康德与中国哲学――以比爾芬格（Bilfinger）的中国哲学観為背景――」（『西学東漸与東亜近代知識的形成与交流』（第四届出版史国際学術研討会論文集）二〇一一年十一月、北京）の日本語訳に加筆・修整したである。

なお、本論文は平成二三年度科学研究費・基盤研究（C）「西洋哲学における宋明理学の受容と展開」（研究課題番号：二一五二〇〇四四）の助成を受けた研究成果である。

注

（1）これらの情報については井川義次『宋学の西遷―近代啓蒙への道』（人文書院、二〇〇九）、井川義次「若きライプニッツと朱子の邂逅」（『知のユーラシア』明治書院、二〇一一）、井川義次「プロスペロ・イントルチェッタ『中国の政治・道徳学』―朱子性理説情報のライプニッツへの流入―」（谷川多佳子・清水洋貴編『ホモコントリビューエンス研究』一般財団法人ホモコントリビューエンス研究所助成「哲学・文名と貢献心」の研究報告書、二〇一一）参照。

（2）*Gedanken von der wahren Schätzung der lebendigen Kräfte*, 1746、大橋容一郎訳「活力測定考」及び解説（『カント全集1 前批判期論集Ⅰ』岩波書店、二〇〇〇）参照。なお引用訳文は本稿に当わせ若干改変した。また松山壽一『若きカントの力学観：『活力測定考』を理解するために』（北樹出版、二〇〇四）参照。なお松山壽一『若きカントの処女作『活力測定考』という文献を綿密に分析し、「カントはニュートン力学を形而上学的に基礎づけた」とする通説が誤りであり、初期カントの力学観について「たんなるヴォルフ力学の枠内のカント力学」であったことを確証した優れた実証研究である。

（3）De viribus corpori moto insitis et illarum mensura, 1725, *Comentarii Academiae Petropolitanae*, 1726/28, Tom.1.

（4）Martin Schönfeld, *The Philosophy of the Young Kant: The Precritical Project*, Oxford University Press, 2000, Kant's Thing in itself or the Tao of Königsberg, *Florida Philosophical Review* Vol. III, 2003, Kant's Philosophical Development, *Stanford Encyclopedia of Philosophy*, First published, 2003; substantive revision, 2007.

（5）「ドイツ啓蒙の異世界理解」（『一つの世界』）の成立とその条件』国際高等研究所、二〇〇七）参照。

（6）なおイエズス会宣教師の「四書」解釈における張居正注解への依存に関しては、アメリカの Knud Lundbaek や David E. Mungello、中国の張西平の著作群、日本の堀池信夫『中国哲学とヨーロッパの哲学者　上・下』（明治書院、一九九六、二〇〇二）等の指摘がある。また張居正注とラテン語訳文の対応関係、ヴォルフによる儒教情報受容については井川義次『宋学の西遷―近代啓蒙への道』第一部第二章（人文書院、二〇〇九）参照。

Young Knat and Chinese Philosophy
—— Focusing on the Chinese Informations of Bilfinger

Yoshitsugu IGAWA

Immanuel Kant researched about physics deeply during adolescence. The result *is Gedanken von der wahren Schätzung der lebendigen Kräfte*. Some researchers indicated that the way of thinking in this writing continued and developed even to the second-half thought of Kant. For example, it is the way of thinking which attaches greater importance to a middle and probability than to an Law of excluded middle in logical thinking, etc. Young Kant was confessing that the methodology of the physics paper of Bernhard Bilfinger resembling his own. Bilfinger—belonging to the school of Leibniz and Wolff who highly esteemed the Chinese philosophy—had the very deep knowledge about the Chinese philosophy. For example, Billfinger considered and commented about contents of *The Four Chinese Classics* including *Doctrine of the Mean* earlier than Wolff. The book emphasized that conflicting opinions must be closely examined and balance must be gained. Bilfinger had full knowledge of such methodology through Jesuits translation of chinese classics. This treatise tries to examines a physics article to which Kant referred and contents of the special work about the Chinese philosophy by Billfinger, and to verify whether the basic method theory of the Chinese philosophy flowed in even to Kant's thought.